

# キロスキスタ・ルニフェラ(*Chiloschista lunifera*)の栽培

夏井 高人 (カラー 2 ページ)

## 1 葉のないラン

ランの中には葉のないものがいくらでもある。日本にも多数あり，地生蘭としてはムヨウラン（無葉蘭）が，着生蘭としてはクモラン（蜘蛛蘭）が代表格ではないかと思う。

ムヨウラン等の地生蘭の大半は共生菌から栄養を得ていて光合成をしなくなってしまう植物ということになっているが，着生蘭であるクモランでは根の部分で光合成を行っている。しかし，クモランはいかにも貧弱な植物であり，その花も極めて小さい。栽培は不可能または著しく困難で，仮に一時的に成功したとしても長続きしない。

世界には，クモランと同様に根しかない着生蘭が多数ある。日本のクモラン (*Taeniophyllum glandulosum*) と似たものとしては，属を異にするが，キロスキスタまたはキロシスタ (*Chiloschista*) と呼ばれる属のランがその代表格ではないだろうかと思う。台湾には「オオクモラン」という和名のあるランがあるが，これはクモラン属 (*Taeniophyllum*) のランではなく，キロスキスタ属 (*Chiloschista*) に属する着生蘭である *Chiloschista segawai* のことを指す。台湾にはこのほかにも何種類かのキロスキタ種植物が存在し，更にフィリピン～中国南部～東南アジアなどにはかなり多種類のキロスキスタ属植物があるらしい。

## 2: キロスキスタ・ルニフェラの栽培

人によっては「気味が悪い」と思うかもしれない根だけのランが何となく気にいって、キロスキスタ・ルニフェラ (*Chiloschista lunifera*) の苗を購入し、栽培しはじめてからかれこれ2年以上になる。

さて、キロスキスタ属のランについては、現実的には栽培不可能な日本のクモランのイメージが強すぎるらしく、例えば、ネット上では「栽培できないラン」として広く知られているようだ。しかし、現実に育ててみると、意外と寒さ暑さや乾燥にも比較的強く、元気に育つランであることがわかった。

購入したばかりの苗は、短い角棒のようなものにビニール紐でしばりつけて着生させたものだった。海外の某有名ナーセリーのWebサイトを観ると、同様のものが多数ぶらさげられている写真を見つけることができるから、おそらく、このナーセリーで育成された栽培品が日本に輸入され、洋ラン店から私の手に渡ったものと推定される。

私は、当初、購入したままの状態でごらさげて育てていた。夏の間は庭のやや日陰の場所にぶらさげ、冬の間は出窓のできるだけ明るいところにぶら下げていた。その出窓は加温している部屋にあるため乾燥するし、夜間には結構冷える。夏にごらさげておいた場所は摂氏30度以上の気温になる。それでも、問題なく成長した。要するに、季節によって休眠させることなく常に成長し続けるような栽培方法を採用した。

水と肥料については、季節を問わず、日中は（可能な限り）霧吹きで水（井戸水）を吹き掛けて湿らせ、夜間はむしろ乾かすような感じで育てた。また、液肥としてハイポネックスを薄く溶かした水溶液をやや頻回に噴霧した。ただし、液肥がそのまま葉に残っていると障害を起こすことがあるようなので、液肥を噴霧した後は、何回か水だけを噴霧し、完全に液肥が

流れ落ちた後に次の液肥を与えるようにした。

このような育て方は、私がカシノキランで実験して有効であることを確かめているやり方をそのまま応用したものだ。日本のカシノキラン

(*Gastrochilus japonicus*) については、私の栽培方法で育成すると、個体の別（個体差）に関係なく、どの産地のものでも季節と無関係に成長し続け、子株を出し、開花させることを（日本のカシノキランについては異なる産地の複数の個体を用いた実験結果によって）証明できている。加えて、外国産のカシノキラン属 (*Gastrochilus*) 植物についても全く同様の結果を得た。しかも、このような好結果はかなり簡単に達成可能なので、カシノキランは、栽培方法さえ間違わなければ、育成及び増殖が極めて容易なランであると判断している。そして、この栽培方法は、少なくともカシノキラン属 (*Gastrochilus*) とキロキスタ属 (*Chiloschista*) のランでは全く問題なく適用可能なものだと考えられる。その要点をまとめると、次のようになる。

- ①日照を十分に与える
- ②冬期間は加温した室内で育て、休眠させないで継続的に成長させる
- ③水をたっぷり噴霧する（ただし、夜間は乾かす）
- ④液肥をやや頻回に噴霧する（ただし、葉に残らないよう水を噴霧して洗い流す）

### 3: キロスキスタ・ルニフェラの葉

キロキスタ属のランには、基本的に葉がなく、樹木に着生する根だけで構成されている。そして、その根のみで光合成を行っているのが普通だ。しかし、この属のランの中には稀に葉を出すものがあるとされており、中でもキロスキスタ・ルニフェラは比較的頻繁に葉を出すことが知られてい

る。私が栽培しているキロスキスタ・ルニフェラについても、現実に、2年ほど前には2枚の葉を出し、昨年には3枚の葉が出た。葉の長さはいずれも2.5センチほどだ。

問題は、この葉がいつまで残っているかだ。

2枚の葉が出たときには、花茎が伸びる春になると葉が落ちてしまった。私の推測では、春になって根の光合成能力が活発になり、根だけで十分に栄養を合成・蓄積できるようになったため、補助的な光合成手段である葉を必要としなくなったのではないかと考えられる。

そこで、少し遮光となるようにして実験してみたところ、葉が3枚出た。その葉は、花茎が伸び、蕾が膨らんできた今日現在でも残っている。その代わり、昨年夏の間には太く伸びた根の一部が部分的にしおれてきたから、不足している栄養を根から吸収しつつ花茎を形成しているものと推定される。根の一部を犠牲にしながら開花させると考える根拠は、例えば、パフィオペディラム (*Paphiopedilum*) では一番古い葉を犠牲にして、その葉の栄養を使いながら花を形成するのと同じだろうと考えるからだ。

もしこの仮説が正しいとすれば、根によく光が当たるようになれば葉が必要なくなって落ちるといった結果が出るだろうと思う。

#### 4: 今後の実験

今年になって、別の種類のキロスキスタ属ランの苗を入手することもできたので、次のシーズンには、ちょっと考えた上で、別の実証実験を試みたいと思っている。